

## 屋外飼養による肥育技術に関する試験

—濃厚飼料の定量給与と粗飼料の組み合わせ—

黒木 寛・横山文泰・長友邦男・井好利郎

(宮崎県総合農業試験場)

KUROGI, H., YOKOYAMA, H., NAGATOMO, K., IYOSHI, T.

Fattening Experiment of Beef Steers on the Feedlot.

—Combination in Controlled Feeding of Concentrate with a few Roughage.—

濃厚飼料の制限給与と粗飼料の有効利用を組み合わせた試験を実施したので、その結果を報告する。

## 1. 試験方法

試験期間は昭和49年12月19日～昭和50年12月14日までの360日間である。試験区分は濃厚飼料を全期間で1頭当り2,010kgに制限し、粗飼料に生草を与える区とサイレージを与える区の2つの試験区と飼料飽食の対照区を設定した。供試牛は生後8ヵ月令の黒毛和種去勢牛を用い、各区6頭ずつの群飼とした。また、肥育促進用ホルモン剤としてシノベックスを2回使用した。

## 2. 試験成績

増体成績は表2に示すとおりである。試験開始時は各区とも240kg程度であったが、終了時には対照区589kg、生草区573kg、サイレージ区549kgとなり、期間中の1日当り増体量はそれぞれ、0.95kg、0.92kg、0.86kgであった。これらはいずれも良好な成績であり、区間に有意差は認められなかった。また、群内のバラツキも少なかったことから、群飼における濃厚飼料の制限給与も、良質粗飼料の確保等により、競合防止に注意を払えば可能で

あると考えられる。

飼料摂取量は表2に示すとおりであり、試験区は対照区に対し、濃厚飼料を約90kg少なく、粗飼料を乾草換算で約50kg多く摂取している。摂取したTDN量は対照区3,143kg、生草区3,106kg、サイレージ区3,099kgであり、試験区の摂取量は日本飼養標準に対比すると1日当り増体量0.8～0.9kgを期待できる養分量であった。このことから、濃厚飼料を2,010kgに制限しても粗飼料による養分補足が可能であると考えられる。粗飼料として用いたサイレージは乾物換算で生草区とほぼ同量を採食していることから、品質に留意すれば十分利用できるものと考えられる。

枝肉成績は区間に有意差は認められず、若令肥育としてはほぼ良好な成績であった。

## 3. まとめ

以上のことから、良質粗飼料を確保できれば、濃厚飼料を1頭当り2,010kgに制限しても、十分な増体量も得ることが可能である。

表 1 試験区分

	対 照 区			生 草 区			サイレージ区		
	濃飼 kg	乾草 kg	生草 kg	濃飼 kg	乾草 kg	生草 kg	濃飼 kg	乾草 kg	サイレージ kg
肥育前期	飽食	1.0	飽食	3.5～4.0	1.0	飽食	3.5～4.0	1.0	飽食
肥育中期	飽食	1.0	飽食	5.5～6.0	1.0	飽食	5.5～6.0	1.0	飽食
肥育後期	飽食	飽食	—	7.0～7.5	飽食	—	7.0～7.5	飽食	—

表 2 増体量および飼料摂取量

区 別	頭数	開始時体重 kg	終了時体重 kg	1日当り増体量 kg	濃厚飼料摂取量 kg	粗飼料摂取量 (乾草換算) kg
対 照 区	6	245.7±26.5	588.5±43.1	0.95±0.08	2,099	1,044
生 草 区	6	243.3±17.3	573.0±30.9	0.92±0.08	2,010	1,096
サイレージ区	6	241.3±18.4	548.8±15.8	0.86±0.09	2,004	1,093